「虚業家」による泡沫銀行の利権保有と鉱業投資

―松谷元三郎らによる朝日銀行，釧路炭砿への関与を中心に―

小　川　　功

はじめに

大幅に規制緩和された現在の資本市場では敵対的買収が活発化する「大買収時代」を迎えつつあり，盛んに乗っ取り行為を仕掛けるような特定の人物が世間の注目を集めつつある。実は各種規制の緩かった戦前期の株式市場でも買占め・乗っ取り行為は頻発しており，現在と過去の対比が各方面から注目されている。[1)]

筆者も「少しも悪辣の手段を講ずるに躊躇せず…善からぬ策に出…兎角世に不評を招ける[2)]」「天一坊」こと松谷元三郎という株式仲買人出身の特異な投資家（むしろ投機家）に着目して，彼が主体的に関わった豊川鉄道[3)]，八溝金山，日本倉庫[4)]，証券交換所[5)]等に関しては既に著書・論文の中で関説・言及してきた。

1）小林和子「日本市場の乗っ取り拒否体質と法制―東洋精糖事件を顧みる―」『証券アナリストジャーナル』43巻７号，平成17年７月。小林和子「昭和30年代の買占め熱を顧みる」『証券レビュー』45巻12号，日本証券経済研究所，平成17年12月

2）明治43年８月６日保険銀行時報。松谷元三郎は明治31年６月21日大株仲買人開業，32年では大阪市北区堂島中１，大株仲買人(諸 M32，p280)，32年10月２日廃業(『大株五十年史』昭和３年，p19)したが，抜け目のない大相場師の高倉藤平すら「三十四年松谷天一坊に一杯食されて豊川鉄道株を買占め，その結果僅か三万円の金にも手詰りして，十月には終に仲買を廃業せざるを得ない程の酷い目に逢った」(朝比奈知泉編『財界名士失敗談』明治42年，p306)と「一生一代の失敗」を述懐するほどの策士として有名であった。

3）豊川鉄道は拙著『企業破綻と金融破綻―負の連鎖とリスク増幅のメカニズム―』，九州大学出版会，平成14年，p48以下参照

4）八溝金山，日本倉庫は拙稿「証券業者による鉱山経営とリスク管理―八溝金山事件を中心として―」『彦根論叢』第354号，2005年５月，p49以下参照

5）証券交換所は拙稿「大正バブル期における起業活動とリスク管理―高倉藤平・為三経営の日本積善銀行破綻の背景―」『滋賀大学経済学部研究年報』第10巻，平成15年12月，p30以↗

しかし松谷は常に「黒幕の人として…蔭に隠れ[6]」るなど，買占め・乗っ取り行為に不可避な匿名性・非公然性の故に彼の経済活動の全貌は数多くの相場関連書籍での断片的な言及[7]にもかかわらず，依然として未解明部分が多いといわざるを得ない。このことは情報開示が建前の現在の資本市場でも村上世彰，堀江貴文といった投資事業組合形態を駆使するタイプの投資家の情報がほとんど開示されていないのと類似した側面がある。

本稿では八溝金山事件を扱った前稿に引き続き，松谷らの一派が長期間にわたって保有し続けた，ある泡沫銀行の甚だしい彷徨・漂流状況と，同行の関係先の一つと推測される釧路の炭砿企業を取り上げ，松谷の未解明部分に可能な限り接近しようと試みたものである。特に「金持ちから資本を引き出すことにかけては蓋し天下一品[8]」と評された松谷の人心掌握・籠絡術の天才ぶりに注目したものである。本稿でも岐阜県の豪農出身の鉄道資本家・岩田作兵衛一族や，播州の豪農・内藤久三郎一族などを巧みに籠絡して自家薬籠中の物となすべく画策した様子が窺えよう。資産家の視点に立てば松谷の如き特異な人物（筆

↘　下参照

6）長谷川光太郎『兜町盛衰記』第一巻，日本証券新聞社，昭和32年，p262

7）主なものとしては野依秀市編『財界物故傑物伝』下巻，実業之世界社，昭和11年，p414～419のほか，前掲『財界名士失敗談』p306，狩野雅郎『買占物語』銀行問題研究会，大正15年，p57～68，109～116，199～203，佐藤善郎『株屋町五十年と算盤哲学』昭和４年，p32，南波礼吉『日本買占史』春陽堂，昭和５年，p61～69，96～104，176～179，報知新聞経済部編『相場実話』千倉書房，昭和７年，p133，『風雲六十三年　神田鐳蔵翁』紅葉会，昭和28年，p34，前掲『兜町盛衰記』第一巻，205～218，p260～271，松永定一『北浜盛衰記』東洋経済新報社，昭和34年，p40～42，壁井与三郎『大相場師』東洋経済新報社，昭和59年，p63～81など多数。松谷は「屡次の失敗により，明治四十年以後はそのなすところ，漸く反省を加へて，また往年の猪突的意気を露出するには至らなかった」（前掲『財界物故傑物伝』下巻，p418）とされるが，明治40年以降，死亡した大正10年までの間にも「生命保険会社の買収に甘き汁を吸はん」（M43. 8．6保銀）とした仁寿生命や，内国通運等多数の買占めを行った。なお松谷と第四銀行との関係は『滋賀銀行五十年史』（後述）を参照。

8）南波礼吉『株界生活六十年』昭和28年，p118。豊川鉄道買占めの金主となった岐阜県土岐郡多治見町の名家の子息である西浦仁三郎の場合は「地方の素封家として，人一倍の野心を抱き，都会の名士と交際を結ぼうとしたところから，ツイ松谷さんの口車に乗り，豊川鉄道の買占めに資金を出し，その後盾を勤めたばかりに失敗して，大きな損失を蒙って…遂に家産を傾け」（前掲『兜町盛衰記』p218）たとされる。また河村寛祐（元代議士）は三井銀行勤務を経て明治43年４月内国生命専務となって経営に当ったが，「会社の内容が多少予期に反するものがあり，挽回策に焦慮」（T14. 4．18法律），欠損補填策に苦慮していた↗

者の想定する「虚業家」[9]）の甘言，美辞巧言に起因する欺罔・瞞着・騙取等のリスクということになる。

しかし本稿では銀行・炭砿両社間の緊密な人的結合面までの分析にとどまり，残念ながら松谷らが機関銀行としていかに活用したかの解明にまで迫ることができなかった。また釧路地方の炭砿に関し現地調査等[10]も不十分であり，今後とも調査を継続[11]して当該分野の専門家からのご指摘を頂く機会を得たいと考えている。なお本稿[12]では会社録等の頻出資料は略称[13]で本文中に示した。また文中の朝日銀行（明治期）は旧あさひ銀行（現りそな銀行）とは無関係である。

Ⅰ　朝日銀行

１．大阪四ッ橋銀行

朝日銀行（明治39年６月現在の名称）は明治29年12月10日四ッ橋銀行として大阪に設立，30年四ッ橋銀行が大阪四ッ橋銀行と改称した[14]。

東播地方の政商・西村真太郎を中心に大阪胞衣，貸家保証両社の関係者が役

↘ 折に，松谷元三郎から「非常の苦境を脱するには米相場に手を染むるに如くはなしと慫慂され，松谷の名義で相場に手を出した結果，更に百幾十万円の社金を費消」（T11.10.25法律）したとされた。

9）「虚業家」に関しては拙稿「企業家と虚業家」『企業家研究』第２号，企業家研究フォーラム，有斐閣，平成17年６月，拙著『「虚業家」による泡沫会社乱造・自己破綻と株主リスク―大正期“会社魔”松島肇の事例を中心に―』滋賀大学経済学部研究叢書第42号，平成18年３月，序章

10）平成11年９月25日釧路公立大学で開催された鉄道史学会大会で寺島敏治氏らの炭砿研究報告に多くの示唆を得たほか，宮下弘美氏らの案内で太平洋炭砿（稼業中），雄別炭砿鉄道等の現地視察の貴重な機会を得た点に謝意を表したい。

11）舌辛，白糠，庶路等の各地に試掘権を有した大北炭砿を予定

12）本稿は科学研究費補助金「金融ビジネス・モデルの変遷」（基盤研究Ｂ，課題番号17330079，代表者斎藤憲氏）の研究成果の一部である。

13）（新聞）大毎…大阪毎日新聞，法律…法律新聞，鉱業…日本鉱業新聞，道鉱…北海道鉱業新報 M40.５.25，保銀…保険銀行時報／（雑誌）Ｂ…『銀行通信録』，Ｋ…『東京経済雑誌』，Ｄ…『ダイヤモンド』／（会社録）商…『日本全国商工人名録』，諸…牧野元良編『日本全国諸会社役員録』商業興信所，帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所，要録…『銀行会社要録』，紳…『日本紳士録』交詢社，商工…『商工信用録』東京興信所／（頻出資料）名鑑…『日本鉱業名鑑』大正７年，株…『全国株主要覧』

14）『本邦銀行変遷史』，p838,101。ただし明治33年12月『銀行通信録』第181号では30年７月設立。この種の「目まぐるしく銀行の本・支店を移動させた」（渋谷隆一「『銀行事故調・↗

員に加わって設立された。大阪四ッ橋銀行頭取に就任した中心人物の西村真太郎（加東郡下東条村）は27年第３回選挙で兵庫県選出代議士当選，播磨鉄道発起人・500株取締役[15]，神栄監査役，社銀行頭取，西丹貯蓄銀行取締役[16]，39年２月頃伊藤長次郎と日韓銀行設立を企画（M39. ２B），播州鉄道評議員，滝野現米売買会社社長のほか，社村の合資加東米穀取引所理事長（商 M31ほ，p118），台湾銀行創立委員・監査役，40年６月設立の関西馬匹改良取締役，旧京都生命が41年４月１日改称した博愛生命[17]監査役・株主，43年創立の関西競馬倶楽部監査役，神戸米穀取引所理事，「其他諸会社の顧問，相談役に挙げらるること枚挙に遑あらず[18]」と大活躍したが，42年「大会社の重役，代議士前代議士合せて二十名，其他県会議長，市会議員という厳めしい肩書の連中が一網打尽数珠繋ぎとなった[19]」「日糖事件に相関連して獄裡の人となり，令名為めに地を払ふの逆運に到達した[20]」。後年に社自動車運輸を設立した[21]。実弟は西村隆次（社銀行取締役）で，「加東郡の人物界に於て最も辛辣過酷の敏腕を有するものは西村真太郎，西村隆次の兄弟である[22]」と評されたほどの辣腕家であった。

31年９月現在では本店は大阪市西区長堀北通一丁目，支店を東京，岐阜市ほか合計５カ所に置き，資本金30万円，払込7.5万円，積立金588円，頭取西村真太郎，取締役中浜善右衛門[23]，妹尾源次郎[24]，小山喜平治（大阪市西区新町南），

↘ 全』解題」，『経済学論集』第６巻臨時号，昭和50年３月，p６）“漂流”銀行の典型例としては明治42年４月20日破産宣告を受けた東京市の早稲田銀行（M42. ５. B），広島市の広業銀行などがある。（前掲『銀行事故調・全』p１～３，10～12参照）

15）『鉄道院文書』「播磨鉄道巻全」

16）木内英雄蔵版『兵庫県管内紳士録』明治39年，p105，150ほか

17）京都生命，博愛生命は拙稿「“虚業家”守山又三のハイ・リスク行動と京都財界」『京都学園大学経済学部論集』第12巻第２号，平成14年12月，p４以下参照

18）20）富谷益蔵『兵庫県官民肖像録』博進社，大正７年，p43

19）大正12年７月『神戸新聞』「今昔物語砂糖の巻（14）」

21）『新修加東郡誌』加東郡教育委員会，昭和49年，p651

22）田住豊四郎編『兵庫県人物史』明治44年，p541

23）中浜善右衛門（大阪市南区難波元町）は大阪胞衣常務，所得税26円74銭５厘（紳 M31，p805），貸家保証監査役（紳 M41，p130）

24）妹尾源次郎（大阪市南区笠屋町）は大阪四ッ橋銀行取締役のみ，所得税８円16銭（紳 M31，p1025），紳 M41，なし

25）長門勇輔（大阪市西区本田）は明治６年５月生，職業空欄，第四銀行，貸家保証各取締役，↗

長門勇輔[25]，内田正隆，長屋代造，監査役妹尾平三郎[26]，高原重太郎[27]，赤松敬次郎であった。（商 M31は，p207）

33年では大阪四ッ橋銀行は内田正隆，長屋代造，妹尾平三郎が退任し，監査役に篠川利祐[28]が就任，支配人心得は英鉄雄[29]，計算部主任は古堀寅之助であった。（諸 M33，p232）

33年７月大阪四ッ橋銀行は株主総会で現在30万円（うち10万円払込）の「資本金を十万円に，払込高を二万五千円に切下げ，且つ従来五箇所に設けありし支店を悉く閉鎖すると同時に，五千円の払込を為し，尚去る九月を以て七万円の未払込株金をも徴収する[30]」本格的な整理案を決議した。しかし新規払込に異議を唱える株主が多く，決議は実行されなかった。

こうした窮状の最中に33年10月以降に「松谷元三郎，内藤久三郎諸氏にて同行を引受ることとなりたるより，過般旧重役は悉く辞任[31]」するという経営権移転が発生した。松谷の立場でみると，従来から松谷の主力取引銀行となって，「岡山銀行の手と思はるる定期米及び堂島株の買占め」（M32. ４. 26大毎）などと報じられた岡山銀行が「昨＜32＞年堂島事件以来太く世間の信用を失し…同時に巨額の損失ありしを以て到底立行くべき見込なし」（M33. ４. ７K）として33年４月１日大株主会で解散に決し，34年正式に解散決議をした事情が考えられる。33年６月頃から買占めた「豊川鉄道株買占で一時小三十万円儲けた[32]」

↘ 所得税47円（『商工業者資産録』M34，p304），貸家保証取締役（諸 M33，p266），刷子製造業，所得税184円（紳 M41, p141）。明治37年天塩国幌延炭坑（大谷坑）を試掘した本願寺農場管理人（『幌延町史』昭和49年，p253～５）

26）妹尾平三郎（大阪市南区二ツ井）は安政元年１月生れ，糸物小売・せのや，公債株券類4, 946円，市街宅地家屋26, 690円，所得税17円，営業税31円（『商工業者資産録』M34，p594），糸物商・せのや，所得税49円（紳 M41, p286）

27）高原重太郎（兵庫県加西郡賀茂村）は大地主，明治31年の地価額10, 148円96銭８厘（商 M31ほ，p121），西村真太郎が理事長の加東米穀取引所理事，西村真太郎が頭取の社銀行監査役（『日本全国商工人名録』明治31年ほ，p118, 96）

28）篠川利祐（大阪市南区天王寺）は貸家保証社長（諸 M33，p265），『商工業者資産録』M34, なし，会社員，所得税８円73銭（紳 M31，p961）

29）英鉄雄（大阪市西区西長堀北通一丁目／大阪市西区本田）は大阪胞衣監査役，貸家保証支配人，公債株券類830円，所得税３円（『商工業者資産録』M34，p60），貸家保証支配人（諸 M33，p266）

30）31）34）44）明治33年12月『銀行通信録』第181号

と松谷自身が述懐するように，当時豊川鉄道買占めで調子に乗っていた松谷は清算にはいった岡山銀行に代えて大阪四ッ橋銀行を次の手品の種に活用しようと狙いをつけたものとみられる。この時点で播州の豪農・内藤久三郎，株式仲買人の仁村清太郎，堀直之助[33]の３名が新たに取締役となり，同時に那須芳三郎が入行し，これら松谷一派が大阪四ッ橋銀行の「内部の整理に従事しつつあり[34]」と報じられた。

まず内藤久三郎は31年の地価額32,272円67銭４厘（商 M31ほ，p122）の兵庫県神崎郡川辺村ノ内屋形村の大地主で，松谷元三郎のパトロンである「播州の豪農内藤久三郎と云ふ男[35]」と同一と思われる。大阪四ッ橋銀行の筆頭取締役（諸 M34，p257）のほかにも地元神崎郡の田原銀行監査役（商 M31ほ，p97）を兼ねた。なお兵庫県神崎郡川辺村には同姓の内藤利八[36]はじめ，内藤姓の地主が多数みられる。

千原伊之吉によれば松谷は「播州の豪農内藤久三郎と云ふ男の財産十五万円を挙げて，大阪で金貸を始め[37]」たとするが，守山又三[38]はかって石倉宇之吉の仲介で松谷に高利で貸したことがあるため，松谷は「守山と云ふ男は相当な腕利であるから融通をして遣っても宜いとは思ふが，併し人間が甚だ良しくない男だから，貸すのが嫌だ[39]」と守山への融資を拒絶した因縁があるとされる。この内藤の資金により「大阪で金貸を始め」たのが大阪四ッ橋銀行の買収を指すと解すると，同行は守山の如きハイリスクの融資先に高利で貸付けていたものと思われる。

32）42）朝比奈知泉編『財界名士失敗談』42年，毎夕新聞社，p293～４

33）堀直之助（兵庫県神崎郡鶴居村ノ内沢村）は経歴未詳。

35）37）39）千原伊之吉『成金物語』p35～36。著者の千原伊之吉は豊後の豪農の出身，明治33年春に吉本庄平の堂島米穀仲買店を引受け，松谷，守山らとも相場仲間で39年８月大株，鐘紡などの仕手相場で一躍成金となった相場師。

36）内藤利八（兵庫県神崎郡川辺村東川辺）は明治28年11月飾磨銀行発起人，生野馬車鉄道発起人780株引受，播但鉄道原始発起人・社長・最終清算人，姫路商業銀行，姫路電灯各監査役，播磨採鉄㈾業務担当社員ほか，後に播磨電気軌道発起人，36年第８回選挙で代議士当選

38）守山又三は拙稿「“虚業家”守山又三のハイ・リスク行動と京都財界」『京都学園大学経済学部論集』第12巻第２号，平成14年12月参照

次に仁村清太郎（大阪市東区今橋３）は30年12月11日大阪株式取引所仲買人開業[40]，32年では大阪市西区江戸堀北１，大株仲買人（諸 M32，p280），34年５月19日廃業[41]，38年には若松銀行取締役（諸 M38，上 p22），39年には東京市日本橋区蛎殻２（諸 M38, 上 p22）に移転，44年５月には次節の釧路炭砿㈱取締役のみ（要 M44，役 p71），紳 M41，なし。大正３年時点では日本橋区浜町，「元ト株式仲買人」正味身代・負債，信用の程度 Da（商工Ｔ３, p70），大正９年時点では日本無煙炭鉱監査役ほかを兼務していた。（要Ｔ９役，上 p87）

さらに那須芳三郎（大阪市東区今橋４丁目２）は会社員，所得税22円30銭５厘（紳 M31，p800）であるが，松谷が杉山岩三郎と組んで堂島米穀取引所の総株数5,000株中4,700株を買い占め，松谷自身が32年「三月上旬には早くも取引所を改造して私は事実上の主権者と為り[42]」，５月から10月まで短期間ながら杉山を理事長に推戴[43]した「昨＜32＞年堂島事件の当時堂島米穀取引所支配人たりし[44]」人物であった。監督官庁の農商務省が取引所の会計が乱脈を極めたとして営業停止を命じて松谷一派を追放したため，堂島米穀取引所の「出納掛で杉山＜理事長＞の配下だった那須藤（ママ）三郎が辞任[45]」に追い込まれた。35年時点では後身の第四銀行取締役であった。（諸 M35，下 p341），紳 M41, なし

34年では大阪四ッ橋銀行ら役員は取締役内藤久三郎，堀直之助［前出］，仁村清太郎［前出］，監査役内藤卯三郎，河島外太郎（大阪市西区南堀江下）となっている。内藤卯三郎（兵庫県神崎郡川辺村ノ内西川辺村）は播但鉄道の29年上半期旧210新168，計⑰378株主[46]，田原銀行頭取（商 M31ほ，p97）で31年の地価額14,744円６銭９厘（商 M31ほ，p122）の川辺村の大地主で，内藤久

40）41）『大株五十年史』昭和３年，p19
43）『株式会社大阪堂島米穀取引所沿革』，明治45年，p81
45）狩野雅郎『買占物語』銀行問題研究会，大正15年，p202
46）『鉄道雑誌』27号，明治29年，p34。播但鉄道の明治35年９月末では307株以上の15位までの大株主にはない。（『帝国鉄道要鑑』第二版, 36年，内 p248）播但鉄道は拙稿「播但鉄道の資金調達」野田正穂・老川慶喜編『日本鉄道史の研究』平成14年４月，八朔社，第五章，p146以下参照
47）松谷は豊川鉄道買占めでも大株主ながら紳士録にも記載のない経歴等未詳の人物を多数ダミーとして利用した。

三郎の関係者かと思われる。いずれにせよ同行は内藤家と松谷一派と目される人物[47]で占められていた。（諸 M34，p257）

２．第四銀行→若松銀行

大阪四ッ橋銀行は34年７月13日大阪から滋賀県大津市橋本町に移転し，第四銀行と改称した[48]。この背景について松谷元三郎「一派は今回近江米油取引所を掌握するや，該＜大阪四ッ橋＞銀行を同取引所の機関とする為，第四銀行と改称して大津市橋本町滋賀郡役所跡に移転し七月八日より営業せり[49]」と報じられた。

こうした松谷らの思惑で近江米油取引所監査役の雨森茂市が35年２月松谷のダミーと目される仁村清太郎に代えて第四銀行監査役に補欠選任された[50]。

35年時点の本店大津時代から東京へ移転直後の第四銀行の取締役は菱川時夫，堀富太郎[51]，那須芳三郎［前出］，監査役雨森茂市［前出］，松谷利平であった。（諸 M35，下 p341）松谷利平（大阪市東区北浜３）は堺の米問屋から没落した松谷元三郎の養父[52]で，35年には後身の第四銀行監査役（諸 M35，下 p340），39年には松谷元三郎の所有地の東京府荏原郡羽田村（諸 M39，上 p21）に移転，44年には松谷元三郎と同住所の東京市日本橋区蛎殻町１に移転（要 M44，上 p357），後身の朝日銀行監査役（要 M44，役 p357），後身の若松銀行監査役と，名称や本店の異動にも拘らず一貫して同行に関与し続けた。黒幕に徹して名を出さない松谷に代って，養父が同行の実権を保持する財産管理人の役割を担ったものと思われる。

48）前掲『本邦銀行変遷史』，p422。『滋賀銀行五十年史』（昭和60年，p159, 881）では34年７月８日改称・移転。なお滋賀内に本店を置いたのは34年７月から35年６月までの１年弱であるが，この間淡海銀行会（36年10月25日江州同盟銀行会と改称）にも加入せず（前掲『滋賀銀行五十年史』，p170），アウトサイダー的存在であったと思われる。

49）明治34年８月『銀行通信録』第190号

50）雨森茂市（大阪市北区堂島浜１）は近江出身の米穀仲買人で，近江米油取引所監査役（諸 M35，下 p355）にも就任した。（前掲『滋賀銀行五十年史』，p882）なお大阪堂島米穀取引所仲買人の雨森治郎介［堂島浜通１丁目，所得税８円70銭（紳 M31，p945），諸 M35, 上 p322］との関係は未詳。

51）菱川時夫（岡山県岡山市下西川町），堀富太郎（福岡県京都郡仲津村）はともに遠隔地在住だが経歴未詳。菱川は後身の朝日銀行取締役にも就任（諸 M41，上 p42）

52）野依秀市『財界物故傑物伝　下巻』実業之世界社，p415

第四銀行は35年６月14日の役員会の決議により，35年６月17日付で大津からいったんは大阪市西区土佐堀裏町42番屋敷に移転後，半年以内の同年11月26日には大阪からさらに東京市京橋区銀座四丁目に移転[53]，37年６月14日第四銀行を若松銀行と改称[54]するという短期間に実に目まぐるしい変態を見せた。役員会決議の僅か３日後の本店移転など，夜逃げ同然の店仕舞いを敢行，しかも変更手続には相応の手間と費用を要する以上，何らかの必要性があったわけであるが，県内銀行の一つと認識してかなり詳細な分析を試みた『滋賀銀行五十年史』にも情報が乏しく未詳である。若松銀行役員には財産火災保険にも関与した日本橋近辺の質商が多く，同業者の機関銀行の様相を呈している。取締役は芳井佐右衛門，榎本儀兵衛[55]，斉藤鎗吉[56]，鈴木治右衛門[57]，高橋藤吉[58]，仁村清太郎［日本橋区蛎殻２，前身の大阪四ッ橋銀行取締役（諸 M34，p257）が復帰］，監査役松谷利平（留任），今川繁治郎であった。（諸 M38，上 p22）役員中の今川繁治郎（日本橋区蛎殻１）は「日本橋区蛎殻町１－３松谷方，商店員」（商工Ｔ３，p34）と，おそらく松谷合資[59]の店員であるなど，仁村とともに松谷の配下であることが判明する人物である。松谷系の江戸見崎養魚[60]取締役（諸 M40，上 p173）を兼ね，41年当時の住所の茨城県久慈郡黒沢村（諸 M41，上 p42）は八溝金山31万坪の鉱区所在地であり，金山の実務面を分担したのであろう。

39年の若松銀行は本店日本橋区若松町，資本金10万円，払込98,737円50銭，

53）54）前掲『滋賀銀行五十年史』，p159,882，前掲『本邦銀行変遷史』，p850

55）榎本儀兵衛（深川区佐賀町２丁目）は米・雑穀商，所得税17円80銭５厘（紳 M31，p444），米穀商，所得税179円（紳 M41，p590）

56）斉藤鎗吉（日本橋区浜町二丁目）は質商，所得税４円25銭（紳 M31,p485），財産火災保険監査役（要 M34，役 p369）

57）鈴木治右衛門（日本橋区呉服町）は質・両替商，所得税25円３銭５厘（紳 M31，p595），財産火災保険取締役（要 M34，役 p453）

58）高橋藤吉（日本橋区亀島町１丁目）は，質商，所得税23円65銭５厘（紳 M31，p237），質商，所得税37円（紳 M41，p313）

59）松谷合資は明治37年12月「手形有価証券売買並商品売買」（『日韓商工人名録』明治41年，実業興信所，p73），を目的に日本橋区蛎殻町１丁目３に設立された。資本金１万円，配当前期3.8%，前々期6.54%（諸 M39，上 p176）無限責任社員松谷元三郎2,000円，後藤義三1,000円，出資社員松谷元三（長男）5,000円，松谷イト（妻）1,000円，後藤義三郎1,000円の計５名（要 M40，p345）

60）江戸見崎養魚は拙稿「証券業者による鉱山経営とリスク管理」，p59以下参照

取締役松谷利平［荏原郡羽田村，前出］，竹村陣弌，藤田繁雄[61]，監査役仁村清太郎［日本橋区蛎殻町１，前出］，今川繁治郎［蛎殻町２，前出］であった。（諸 M39，上 p21）有力な商人や会社役員ではない竹村陣弌の住所も松谷と同様に米穀仲買人の集中する蛎殻町であり，今川と同様なレベルの人物と想像される。

３．朝日銀行

39年６月11日若松銀行が朝日銀行と改称した[62]。朝日銀行本店は日本橋区小伝馬町２−８，資本金10万円（払込済）であった。この間，38年11月末には八溝金山事件が起り，黒幕の松谷の名も取り沙汰されたため，松谷との関係を表面上払拭する必要があったのかもしれない。このため，朝日銀行の新役員には以下にみるように，これまでの前身行の場合とは異なり明確な松谷系人物を見出せない。すなわち取締役吉岡卯一郎[63]，佐々木善右衛門，並河彰[64]，監査役恒松隆慶[65]，河上英であった。（要 M40，p103）おそらく島根県選出の政友会代議士である恒松隆慶など山陰人脈が中心と考えられる。

42年には朝日銀行の本店は本郷区森川町に移転，資本金10万円（払込済），積立金2,500円であった。役員は再度一変し，取締役菱川時夫［前身の第四銀行取締役］，辻安次郎，中川庫三郎[66]，監査役川崎林吉，今川繁治郎［前出の若松銀行監査役］であり，再び松谷直系の人物が多く顔を揃えた[67]。すなわち辻安次郎（川崎町／静岡県浜名郡龍池村）は前述の江戸見崎養魚㈱の監査役を明治40年代に務めた松谷系の人物である。（諸 M40，上 p173，諸 M45，上 p175）

61）竹村陣弌（日本橋区蠣殻町１），藤田繁雄（日本橋区平松町）は経歴未詳。

62）前掲『本邦銀行変遷史』，p15

63）吉岡卯一郎（日本橋区小伝馬町）は朝日銀行頭取のみ（要 M40，役 p205），大正５年では松江市，釜山商業銀行査役（帝Ｔ５職，p102）の同名あり

64）佐々木善右衛門，並河彰および河上英は経歴未詳

65）恒松隆慶（島根県安濃郡長久村／赤坂区田町）は明治27年代議士当選，政友会所属（『実業家人名辞典』明治44年，ツ p15），北海道馬匹奨励，日本塩業各監査役（紳 M41，p357），日本海鰤漁取締役（要 M44，役 p248），大正５年では島根県農工銀行取締役，簸上鉄道監査役（帝Ｔ５職，p132）

66）中川庫三郎（麹町区上二番），川崎林吉（荏原郡羽田村）は経歴未詳ながら川崎の住所は松谷の江戸見崎養魚経営地内

67）71）『日韓商工人名録』明治41年，実業興信所，p17,53

Ⅱ　釧路炭砿

１．釧路炭砿の創立

これから本節で取り上げる釧路炭砿㈱は野村徳七商店調査部が明治45年１月に初めて刊行した『株式年鑑』の第十四款　鉱山の部20社の一つとして，北海道炭砿汽船等と並んで堂々と収録されている。「同志間の衝突を惹起し一時は…声価と信用とを失墜して泡沫会社の汚名」（道鉱）を浴び，当時繰越損失14万円を抱える無配継続，安値2.8円の非上場のボロ株を野村徳七が記念すべき『株式年鑑』初版にわざわざ選択・収録した意図は不明である。釧路炭砿は日露戦勝景気の中で，「兵頭，神谷，岩田諸氏の熱心なる尽力」（道鉱）により明治39年８月石炭採掘売買を目的として資本金200万円，払込50万円で日本橋区本木材河岸に設立された。当初の役員中には請負業，機械商等受注目的と思われる人物もある中で数少ないプロの鉱業家と目され，舌辛・庶路両鉱区の取得過程にも深く関与したのは兵頭正懿（相談役）・正通（取締役）の兵頭父子である。兵頭正通（麻布区新堀４）は明治８年３月東京府士族兵頭正懿の長男に生れ，明治32年「東京帝国大学法科政治科を卒業し，釧路炭砿会社取締役となり，爾来漁業及鉱業に従事[68]」した人物で，大正３年７月の調査では職業鉱業，正味身代未詳，収入未詳，信用の程度５段階の中位 Ca，所得税341円（商工 T 3，p514），大正５年では静岡県駿東郡片浜村小諏訪，沼津瓦斯監査役（帝 T5，職 p46），６年２月の調査では鉱業，正味身代未詳，収入未詳，信用の程度 Ca，所得税986円（商工 T７，p514）と所得を約３倍に伸ばし，７年では栃木県の幸銅山，静岡県の安良里鉱山等を所有しており（名鑑 T7，p76），株式も仕手株の内国通運300株等を所有（株 T8，上 p283）する典型的な鉱業家であった。（紳 T11，下 p130）

釧路炭砿は本店を日本橋区本木材河岸17［後に現地の釧路国阿寒郡舌辛村（昭

68）『大衆人事録』昭和２年，帝国人事通信社，ヒ p27。兵頭正道は明治38年に認可番号6856～6860の石炭試掘権を得た。（M38．９．17道鉱⑪）

和12年阿寒村と改称）に移転］，社長中村元嘉（後述），専務岩田新之助（後述），取締役兵頭正通，宮腰信次郎（後述），小山新助[69]，監査役岡本善七（後述），窪田弥兵衛（後述），尾崎正若[70]であった。（要 M40，p333）相談役には主唱者の岩田作兵衛（後述，八溝金山取締役），兵頭正懿，神谷伝兵衛（後述）の３名が就任していた[71]。

社長の中村元嘉（麹町区中六番町５）は弁護士で（紳 M41，p381），他に兼務なく（要 M40，役 p280），明治44年には田人無煙炭監査役（要 M44，役 p264）を兼ねた。

専務の岩田新之助（日本橋区本町１丁目，岩田作兵衛と同一）は慶応元年８月岐阜県羽島郡の豪農・大地主の岩田作兵衛という「百万長者の子に生れ[72]」，明治31年では会社員，所得税５円22銭（紳 M31，p23），34年では兼務先記載なく，37年10月京浜電気鉄道取締役就任[73]，39年下期では釧路炭砿取締役，東京点灯監査役（要 M40，役 p24），40年では釧路炭砿取締役，東京点灯監査役，所得税99円（紳 M41，p33），44年５月には釧路炭砿を退任し東京点灯監査役のみとなった。（要 M44，役 p23）大正２年11月の調査では会社員，正味身代未詳，収入未詳，信用の程度５段階の中位 Ca，所得税…円（商工 T３，p24）と冴えず，「新之助氏半生の経歴を検するに未だ多く顕著なる事績を看ず…氏に赫々の功名無く[74]」と評されたが，父岩田作兵衛が「晩年に及び…親しく事務を見ざるに及ぶや，之に代り其関係業務の一切を処理[75]」し，経国銀行頭取，愛知電気鉄道取締役などに就任[76]，その一環で大正３年川越鉄道監査役に就任し，

69）小山新助（四谷区霞丘町）は土木請負業（紳 M41，p57，日韓 p53，商工 T３，p396），釧路炭砿取締役のみ（要 M40，役 p426），木材石材鉄道用材業，帝国シャンパン取締役（五十嵐栄吉『大正人名辞典』大正６年，東洋新報社，p364）

70）尾崎正若（芝区芝公園）は諸機械商・刺賀正商会主（紳 M41，p147），釧路炭砿取締役のみ（要 M40，役 p118），商工 T３なし

72）74）79）『大日本重役大観』大正７年，東京毎日新聞社，p22

73）『京浜電気鉄道沿革史』昭和24年，p167

75）『大日本実業家名鑑』大正８年，実業之世界社，い p10

76）「大日本重役録（大正七年三月末現在）」『大日本重役大観』大正７年，東京毎日新聞社，p４

77）78）『岩田作兵衛翁記功碑並行実』大正10年，p14, 16

「父＜作兵衛＞翁ヲ補ケ画策スル所多キ」[77]も，大正７年死亡した[78]。八溝金山の場合は父の岩田作兵衛が直接取締役に名を連ねたが，「作兵衛氏の企画せる幾多の事業は新之助氏の建策に出づるもの多し」[79]とされるので，自ら取締役となった八溝金山，相談役にとどめた釧路炭砿とも，不肖の長男・岩田新之助あたりが松谷に言葉巧みに勧誘された結果の関与ではなかろうか。

釧路炭砿取締役と八溝金山監査役（諸 M41，下 p91）を兼ねた宮腰信次郎（千駄ヶ谷村）も岩田作兵衛（小倉鉄道発起人），三浦泰輔[80]らが旧金辺鉄道債権者[81]として設立に関与した小倉鉄道の取締役（要 M44，役 p496）であり，やはり松谷元三郎の影響下にあった岩田系の人物であると考えられる。

監査役の岡本善七は元株式仲買，岡本銀行頭取，本郷商業銀行，京浜電気鉄道各監査役，内国通運評議員（要 M34，役 p99）で，松谷の買占めに伴う高値につられ豊川鉄道取締役としての持株㉕100株をおそらく松谷側に全部売却して33年６月８日逸早く豊川鉄道取締役を辞任した人物であり，松谷との接点が認められる。

監査役の窪田弥兵衛（深川区佐賀町）は海産物肥料乾物雑穀商・山形屋，東明石油取締役（要 M34，役 p99）で，26年12月28日設立の房総鉄道取締役140株，29年８月15日の金辺鉄道の創業総会では大株主として役員を指名，37年12月京浜電気鉄道監査役就任，奈多地所合資代表社員（要 M40，役 p329），蔵王石油監査役を兼ねた。（商工 T3，p313）

相談役の神谷伝兵衛は安政２年７月11日三河国幡豆郡に生れ，「一たび投機界に入りて，大に為す所あらんとせしも失敗」[82]した後，茨城県牛久で葡萄酒醸造業を開始し，明治12年浅草花川戸町に洋酒店を開店，後に神谷酒造合資を設立し無限責任社員，富士石油買収，日本石油精製取締役など石油各社，富士革布，旭製薬各社長，日本建築用製紙，日本澱粉，東洋遊園地，輸出食品，九州炭砿汽船各取締役，東京鉄道，日本畜産各監査役など数多くの企業に関与した。

80）三浦泰輔は八溝金山創立時の社長，小倉鉄道発起人・専務

81）金辺鉄道は拙著『企業破綻と金融破綻―負の連鎖とリスク増幅のメカニズム―』，p197 以下参照

82）前掲『大正人名辞典』p680

その後も豊国銀行相談役，東洋耐火煉瓦，日本製粉，帝国火薬工業各取締役，日魯漁業監査役等を兼務し，うち三河鉄道では大正11年４月の死亡まで社長として在任した。

釧路炭砿の設立時期は松谷らが岩田作兵衛ら雨宮敬次郎系統の名前を利用して八溝金山を設立した明治38年６月の約１年後であり，八溝金山事件で世間を震撼させた直後だけに，豊川鉄道や八溝金山でも「自分の名を出さず，架空の人間の名を使って[83]」株を買占め，黒幕に徹していたのと同様に，釧路炭砿でも自己の名前を極力出さなかったと思われる。後年に「此会社の筋書は一種の策士として知られて居る松谷天一坊が之を作」（T8.11.21D）った最後の大芝居である証券交換所を論評した『ダイヤモンド』誌は「此会社の経営者が松谷天一と云ふだけでも先づ疑問を一つ付ける価値がある」（T8.11.21D）と見破っている。

２．釧路炭砿の経営

舌辛川下流に開坑した釧路炭砿の採掘鉱区数３，坪数91万坪，試掘鉱区数７，坪数61万坪であった[84]。舌辛村（現阿寒町）市街地の西北方に位置する乙別（オトンペツ）炭坑は「有望なる四尺，六尺，八尺の炭層を発見し…約五百余人の人夫を使役し盛んにロング掘を開始」（道鉱），「この＜釧路炭砿＞会社で39年より40年にかけて新たに開坑した[85]」もので，77ケ所の切羽を設けて最終的には４坑を掘進して出炭し，貯炭場を大楽毛に置いた。釧路炭砿の39年11月期決算では資本金200万円，うち払込50万円で鉱区地所家屋鉄道炭車に37.7万円，未払鉱区代7.5万円，貯炭場及貯蔵品に2.2万円等を投じた結果，年3.2%配当，積立金245円，役員賞与金245円を支払い，後期に395円を繰り越した。（要 M40，p333）

40年７月９日の地元紙によれば「採炭夫不足のため，充分採炭しあたらざりしが，目下募集中の坑夫も追々入坑すべく，且つ各坑の延切も進捗し，採炭切

83）由利亀一談『相場今昔物語』日本経済新聞社，昭和27年，p59
84）85）88）89）『釧路炭田―資源とヤマの盛衰』昭和49年，釧路市，釧路叢書14巻，p142～143
86）87）明治40年７月９日釧路新聞（前掲『釧路炭田』，p142所収）

羽も増加するを以て，今回長壁法採炭を開始すべし[86]」と報じられ，39～40年の搬出量は約3,000トン，販売実績は官設鉄道釧路線に入札で上塊炭1,811トン，切込炭70トン，随意契約で49トン，釧路寄航の船舶・諸工場等に約1,000トンで，「インクライン並に選炭場などの工事未竣工のため，採炭選炭共に意の如くならず，従って運炭操作等も，極めて微々たるもの[87]」にすぎなかった。阿寒郡舌辛村の乙別炭坑の冬季の運炭は手橇，馬橇によるほかなく，40年１月には積雪がなかったため，運炭には相当苦労した[88]。釧路炭砿のように「馬鉄を持っていない小ヤマは，石炭をはこびだすのに大変な負たんとなった[89]」が，こうした劣悪な運炭条件に日露戦後の不況が襲来したため，釧路炭砿は「運搬設備ノ整ハサルト，炭況不良ノ為メ曽テ採炭ニ制限ヲ加ヘ，規模縮小中ノ処，予期ノ成算立タサル為メ遂ニ廃業スルニ至レリ[90]」と報告された。39年開坑した白糠村内の岬炭坑（鉱業権者菊池晩節）も同様な状況に陥り，同年の出炭1,600トン[91]であったが，「本鉱山ニ於テハ従来一定ノ販路ナキ為メ既ニ貯炭場ノ全部ヲ充填シ，最早蓄積ノ余地ナキニ至リタルヲ以テ爰ニ採炭ヲ休止スルニ至レリ[92]」と報告された。

40年までは変化のなかった役員陣も42年には監査役窪田弥兵衛が死亡し，代って西川敬治[93]が就任しており，技師は長屋恣であった。（諸 M41，上 p145）41年では払込高50万円，諸積立金1,155円，配当率前々期3.2%，前期6.4%で，本店を日本橋区本木材河岸に，出張所を釧路港に，第一砿業所を釧路国阿寒郡舌辛村に置いていた。（諸 M41，上 p145）

釧路炭砿の経営はその後日露戦争後の不況の直撃を受け，44年５月決算の損益面では当期総収入11,792円，当期総支出17,224円，当期損失5,432円となり，繰越欠損金145,452円を計上している。繰越損失を抱えて無配当のため，株価

90）92）農商務省鉱山局編『明治四十一年　本邦鉱業の趨勢』，p225
91）95）102）前掲『釧路炭田』p50～１，『釧路炭田採炭史』2003年，p７
93）西川敬治（日本橋区浜町２）は八王子七十八銀行頭取，甲武鉄道，八十九銀行各監査役（要 M34，役 p61），七十八銀行監査役，東京府農工銀行，農工貯蓄銀行各取締役（紳 M41，p104），商工Ｔ３なし
94）98）『株式年鑑』M45，鉱山 p８，諸 M45，下 p1264

は44年の最高3.6円，最低2.8円と払込額の16円を大きく割り込んでいた。[94] 払込資本金596,429円，資産の部は鉱区開坑費347,988円，馬車軌道輸車路送74,521円，地所家屋什器36,417円，選炭場12,603円，炭車5,078円，貯炭場2,568円，その他13,873円，小計493,048円，未払込株金1,403,571円，繰越欠損金145,452円，借方合計2,042,071円であった。馬車軌道輸車路送勘定を74,521円計上しているのは，「兵頭氏主任となりて其運炭上第一に急務とする専用鉄道の調査に従事し…其筋に出頭」（道鉱），乙別炭坑の山元から貯炭場のある官設鉄道大楽毛駅まで約17.7kmを，原野区画時の予定道路に沿って馬車軌道を設置し，積出港の釧路港までの運炭を目指したことの反映である。[95]

３．朝日銀行との関係

44年５月時点の釧路炭砿役員は取締役社長木村勘之助（後述），専務取締役仲山荘三郎（釧路炭砿，朝日銀行各取締役），取締役仁村清太郎（釧路炭砿，朝日銀行各取締役），藤田包助（八溝金山，釧路炭砿，朝日銀行各取締役），監査役花田満之助[96]，斎藤沢吉[97]であり[98]，仁村，仲山，藤田の３名も松谷系の朝日銀行役員が経営に参加している。

社長の木村勘之助（小石川区林町／麹町区四番町）は十五銀行員として明治35年３月辞任した伴野乙弥に代って４月水戸鉄道社長に就任，364株主であった。[99] 40年時点では十五銀行抵当課長，水戸鉄道，共益人造肥料各社長であった。（要M40，役p506）しかし松谷元三郎が買占めて支配していた時の武田忠臣指名による日本倉庫取締役に挙げられるなど（M43.５.15読売），松谷との緊密な関係が推測される人物である。釧路炭砿の具体的な銀行との取引関係を直接に提示する資料は未見であるが，炭砿の不振，財務整理を反映して債権者と思しき朝日銀行・十五銀行らが新役員を送り込まざるを得なくなったもので

96）花田満之助（麻布区山元町）は武官，所得税36円（紳M41，p78），他に兼務なし（要M44，役p458），日本漁業取締役（帝T5，職p27）

97）斎藤沢吉（日本橋区浜町）は八王子織物・米沢糸織紬商（紳M31，p486），呉服商（紳M41，p647），他に兼務なし（要M44，役p458），呉服商（商工T3，p448），大正６年時点で「別に釧路炭砿株式会社監査役として令名ありしが，今之を辞す」（前掲『大正人名辞典』p428），８年12月24日京浜電気鉄道監査役，11年１月29日死亡（前掲『京浜電気鉄道沿革史』p169）

99）『帝国鉄道要鑑』第２版，36年，内p334

あろうと想像される。

仁村清太郎は33年10月ころ松谷一派が引受けた大阪四ッ橋銀行取締役に就任し，以後も朝日銀行取締役を長く務めた。（諸 M34，p257）藤田包助（麹町区富士見５）は明治２年４月山口県阿武郡徳佐村に生れ，明治法律学校を卒業して「警視庁警部たりしが，後実業界に入り」[100]，江戸見崎養魚監査役（諸 M40，上 p173），八溝金山，釧路炭砿，朝日銀行各取締役（要 M44, 役 p384），江戸見崎養魚監査役（諸 M45，上 p175），大正11年では山口県阿武郡徳佐村に居住（要 T11，役下 p６）し松谷一家経営の北日本興業取締役（要 T11，p222），大正13年山口県五区から代議士当選，立憲政友会に所属した。[101]

専務の仲山荘三郎（日本橋区浜町３／本所区押上町98）も仁村，藤田と同じく朝日銀行取締役（要 M44，役 p272）であり，大正５年時点で釧路炭砿監査役（帝Ｔ５職，p144），９年時点では皆川商事監査役のみであった。（要 T9，役中 p113）

乙別炭坑の末期の大正３年の採炭量はわずか216トンであった。[102] 法人としての釧路炭砿は大正４年ころに会社録から削除される状態に陥ったものと推測される。また松谷元三郎と豊川鉄道買占めの際に協力関係にあった守山又三は「北海道釧路の某鉱山に関係して振出したる小切手二口六千余円が不払となった為め東京の某氏（山本久顕氏なりともいふ）より詐欺の告訴を提起せられ」[104]たとされる。この「釧路の某鉱山」がもし仮に釧路炭砿を指すのであれば，鉱山ブローカーである山本久顕[105]などが未払鉱区代等の債権を有し，同社は廃業，裁判沙汰に巻き込まれた蓋然性が高いものと推測される。

一方大正６年８月合資会社沢口商店は舌辛沢口炭坑（舌辛村）の「事業ニ着手シ，旧坑ノ修繕並ニ掘進ニ従事シ，又貯炭場ノ建築，軌道ノ敷設ヲナシ，十

100）『大衆人事録』昭和２年，帝国人事通信社，フ p16
101）『衆議院要覧』大正13年，p156
103）釧路炭砿専務であった仲山荘三郎は大正５年８月20日を締切りとする『帝国銀行会社要録』では本文の釧路炭砿の記載が削除された後にも職員録には釧路炭砿監査役（帝Ｔ５職，p144）として残されている。
104）大正３年２月10日大阪毎日新聞社会面
105）山本久顕は南日本製糖専務，大東鉱業社長，山本鉱業部無限責任社員（名鑑 T7，p42）

二月出炭ヲ見ルニ至レリ。尚新坑並ニ大楽毛駅ニ至ル約十四哩ノ運炭軌道敷設準備中ナリ[106]」と報告した。舌辛沢口炭坑は沢口商店が大正６年ころに旧坑の鉱業権を継承して修繕して再開した炭坑であるが，この旧坑はおそらく大正初期に廃業に追い込まれた釧路炭砿所属の乙別炭坑に相当するものと思われる。沢口炭坑（阿寒川右岸）～大楽毛駅間約14哩の馬車軌道も旧坑時代に着手されていたものを沢口商店の手で更新した可能性もあろう。運炭用馬車軌道は大正12年１月の北海炭砿鉄道（後に雄別炭砿鉄道）の開通までは雄別地区の各鉱区にも利用された。雄別炭砿の元従業員の証言では「大正10年暮れ大楽毛から舌辛の沢口炭砿まで馬鉄にのり，あとは歩いて雄別炭山にきた[107]」と，便乗経験を語っている。大正13年刊行の『北海道案内』にも「舌辛村には沢口炭砿会社の炭砿があって，会社は石炭搬出の為め当＜大楽毛＞駅前から馬車軌道を敷設してゐる[108]」と記載されている。

むすびにかえて

朝日銀行はその後も目まぐるしい改称を繰り返す。44年４月30日東洋銀行と改称，45年５月25日帝国実業銀行と改称，大正５年７月７日恒産銀行と改称，高柳淳之助[110]のパートナー大迫利亮らが経営した。この時点では完全に松谷との関係は解消したものと推測される。この後も同行の権利は少なくとも大迫利亮→小出熊吉→岩田三平[112]へと，札付きの人物に変更された後に，漂流を続けた皇

106）農商務省鉱山局編『大正六年　本邦鉱業の趨勢』，p158
107）前掲『釧路炭田』，p187
108）高橋理一郎『北海道案内』大正13年，p277
109）111）『本邦銀行変遷史』p550，523，248～９
110）高柳淳之助，大迫利亮らについては拙稿「“虚業家”集団『高柳王国』の形成と崩壊―大衆資金のハイ・リスク分野への誘導と収奪―」『彦根論叢』第351号，平成16年11月参照
112）危険銀行，不良銀行とされた早稲田銀行の場合は，当初中山実業銀行を名乗っていたが「頭取深沢良介の詐欺取財を以て処罰せられたる為め次で帝国銀行と改称し」（M42．５．B），預金を「支払はず為めに世間の攻撃甚しきより」（M42．５．B）「既ニ信用失墜セル旧商号ヲ忌ミ，現商号ニ改メタ」（前掲『銀行事故調・全』，ｐ２）とされた。本稿の四ッ橋銀行の場合は早稲田銀行や，同じく「屡々商号ヲ改ムルト共ニ営業所ノ移転ヲ事トセル」（前掲『銀行事故調・全』，p10）広業銀行，関西銀行，大東ビルブローカー銀行，把木銀行等と比較しても度を越した改称・移転である。なお四ッ橋銀行とその後身各行は『銀行事故調・↗

国銀行は最終的に昭和３年７月27日営業免許取消となった。[111)]

松谷が明治33年に大阪四ッ橋銀行を引受けて以来，松谷系の人物が同一銀行に出たり入ったりする都度，改称を重ねた真意[112)]は計り兼ねるが，『銀行事故調・全』を発掘，覆刻された渋谷隆一氏は同書の解題の中で投機的・高利貸的銀行が「詐欺的な預金吸収を目的に目まぐるしく銀行の本・支店を移動させた[113)]」ものと指摘している。

昨今の「振り込め詐欺師」が使い捨ての架空口座を乱用するように，当時の虚業家連中は「既存のぼろ銀行の営業権を譲受け，夫を改称し，又新に資金を注ぎ込んで，全く新規に遣り直す[114)]」というボロ銀行の更新手法が横行していた。東京にはこのための素材となる「ぼろ銀行の周旋」を専門とする「引受屋が少からず有る[115)]」とされるので，松谷派が商品名・朝日銀行という名のボロ銀行周旋業を直営し，同一商品の売却と買い戻しを繰り返していたとも解される。

いずれにせよ，本稿は渋谷隆一氏により「従来日の目をみなかった」「従来の研究で見過されてきた[116)]」と指摘された未解明の中小零細銀行，投機的・高利貸的銀行の実態，さらにはボロ銀行，泡沫銀行，詐欺的銀行などによる虚構の「ビジネス・モデル」の解明へむけての一歩にすぎない。本稿で大阪四ツ橋銀行役員として登場した長門勇輔は東本願寺法主大谷光演（句仏）が明治末に取得した大谷炭坑の先行試掘者である。野村徳七は岡本米蔵[117)]が「句仏上人に北海道の鉱山を勧めた[118)]」と自伝で述べており，長門と岡本らの接点に松谷らが介在するなど，守山又三・山本久顕らを含め，かかる虚業家連中相互の何らかのネットワークが存在した可能性を示唆しているようにも考えられる。

↘　全』には記載がなく，当時の金融当局にマークされていなかった可能性もあろう。

113）116）前掲渋谷「『銀行事故調・全』解題」p６

114）115）池島民理『株式会社の裏面』精禾堂，大正８年，p127

117）句仏の「常習取巻連」と見做された岡本米蔵の前半生については拙稿「法人向“海外投資不動産ファンド”の創始者のリスク選好―紐育土地建物社長・岡本米蔵の前半生―」『彦根論叢』第357号，平成18年２月参照

118）野村得庵「蔦葛」５-19（野村合名社内誌『倭』連載）